

近世における開発と地域づくり

**The development of a region in early modern ages from development of new fields standpoint**

過疎化、中心商店街の空洞化など、現在の日本の地域はさまざまな点で問題を抱えている。環境問題も地球温暖化のように全地球的な問題もあるが、海岸浸食による砂浜の消失、都市化に伴うヒートアイランドなど地域レベルで発生する問題も多々存在する。このような環境問題は、多くの地域住民にとって生活環境を悪化させる要因になりうる。自治体はこのような問題に対処する必要があり、これまで多くの施策を行ってきた。

地域計画は自然環境のほか、地域経済や居住環境、インフラ整備など多岐にわたった総合的なものである。地方公共団体はそれぞれの地域の現状を踏まえて地域計画を策定している。地域の実情はそれぞれの地理的・歴史的条件などによって異なっており、安直に他の成功例をそのまま当てはめただけではうまくいかない場合が多い。地域の特性を的確に捉えたうえで、それぞれの地域に合った計画を立案・実行する必要があるといえる。

この研究の趣旨は、近世日本において人々が自分たちの活動に適した地域を作り上げていく過程を明らかにすることである。近世に限らず、人々は地域のなかで暮らす中で自分たちの活動にふさわしい環境を作り出す。そのような人々による地域づくりの積み重ねが現在の地域の姿といえるのではないだろうか。現在の地域に関する問題を考える上でも、現在の状況をまず把握するところからはじめる必要があるように思われる。

対象地域は仙台藩領の低地であり、仙台平野の広大な水田が近世においてどのように造成され維持されてきたかが博士課程におけるテーマである。仙台藩では、近世に河川の下流域の開発が大々的に行われている。開発は自分たちの活動に適した環境をつくるという行為そのものであり、地域づくりの様相を見るうえでわかりやすい事例であるといえる。

方法としては各地域に残る多様な史料を歴史学的分析手法に限らず、地理学的な分析なども併用して整理・分析を行う。これにより他の地域との共通性、差異が鮮明になり、さまざまな条件により多様な地域が形作られていくのを明らかにできると想定されるからである。

卒業・修士論文においては、仙台藩領である陸奥国登米郡（現・宮城県登米市）を事例に地域づくりの様相を整理した。その結果、近世の登米郡では活路を低湿地での米の増産に見出し、登米伊達氏などの給人が在地の有力百姓や旧地域領主の協力を受けて、現在の田園風景の基礎を作ったものと推定した。また、同じ登米郡内でも給人の領地の分布状況などに差異が認められ、この影響で地域づくりの過程にも違いが生じることが明らかになった。しかし、低湿地での米作りに重点を置くという点では基本的に一致しているので、その基盤を維持するために地域内で結束することも多々見られた。